



「平成三十年」という近未来小説をご存じでしょうか。とい

っても、もう過去のですね。この小説が全国紙に連載されたのは、今から20年以上も前の1997年のこと。

「中山間地域で過疎化が進む、過疎になるから仕事もなくなる」

「名目GDPは1300兆にまで膨張し、一方、国債の残高はほぼ2000兆にまで達している」

「国民の税+社会保障費の負担も上昇。平均的な給与と所得者の場合、給料の14%が年金保険料、20%が所得税、6%が地方税として天引きされている…」

それぞれ数字は違えども、いまの危機的状況を見事に言い当てているこの作品を書かれたのが、作家の堺屋太一さんでし

93

作家 堺屋太一



この国の延命に捧げた命

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

た。2月8日、都内の病院で死去されました。享年83。死因は多臓器不全とのことでした。

多臓器不全は、命を維持するために不可欠な内臓―脳、心臓、肺、肝臓、腎臓などの臓器のうち、2つ以上の臓器が機能しなくなることを言います。

たとえばがんの末期でも、人工透析による腎臓障害でも、重症の感染症でも、急性心不全の

ような突然死の色合いが強いものでも、あるいは事故や外傷で集中管理の果てでも、死因は「多臓器不全」となることがあります。ですから多臓器不全は病名ではなく、状態なのです。

堺屋さんがどんな疾患から多臓器不全となったのか報道されていませんが、1月までテレビ出演も執筆活動も変わらずに

出ているというところから、報道を見る限りはそれほど重病だったとは思えません。加齢に伴い徐々に身体の機能が低下した結果なのかと推測していま

す。先の小説はもろろんのこと、70年代に発表した『油断!』

強会にもときどきお見えになっていました。

数年前、ある勉強会でご一緒した際、僭越（せんえつ）にも私の著書『平穩死 10の条件』をプレゼントしたこともありました。興味深げにすぐに本をめぐっておられました。

長い闘病をされずに旅立ったと聞いて、もしかしたら、過剰な延命治療は拒否されたのでは？ リビングウイルがあったのでは？ と、本を渡したあの日、このことを思い出した次第です。

堺屋さんは自分のことをさっちのけで、国家のために勉強をし、奔走された人です。しかし、『団塊の世代』で書かれた警告を、多くの政治家たち、官僚たちは、重く受け止めてこなかったのでは…。平成ニッポンは何もしなかったと嘆いてもおられました。

この国の「延命」のために命を捧げた人が死んでしまった。漠たる不安が過（よぎ）る、如月の夜です。

『団塊の世代』からずっとこの国の未来を予測、予言されていた堺屋さん。社会保障や医療経済の勉